



川崎歴史ガイド

中原街道

ルート





江戸と平塚の中原を結ぶ道は中原街道と呼ばれました。

この街道は、江戸虎の門を起点として、三田、馬込を通り、丸子で多摩川を渡り、佐江戸、瀬谷、用田を経てさらに相模川を越え、平塚の中原で東海道につながる道です。

この道は中原街道と呼ばれたほか、相模を通り、この地域で織り成されてきた歴史を偲ぶことができます。



●宝暦12(1762)年の小杉村と中原街道（安藤家所蔵）

やがて東海道が整備され、大名行列などの多くがそちらを通るようになつた頃、御殿の存在意義は薄れ、万治3(1660)年までに建物は全て移築されてしましました。この頃から中原街道は脇往還となり、以前の賑いを失つていきます。

しかし、中原街道は沿線の物資や農産物の輸送などに欠かせない大切な道として、その後も人々の生活に深い関わりを持ち続けてきました。今も街道沿いには旧家や古くからの商家、地名、石仏、石碑などが残り、この地域で織り成されてきた歴史を偲ぶことができます。

が江戸城へ運ばれたので「お酢街道」、あるいは、江戸の猿町を通っていたので「猿町街道」などと呼ばされました。後には、東海道から江戸への抜け道として「江戸間道」、また、ずっと後、小杉あたりでは、「下肥を積んだ荷車が頻繁に往来したので「こやし街道」などとも呼ばれました。

徳川家康

が初めて江戸に入った天正18(1590)年、まだ東海道は整備されておらず、家康は平塚からほぼ直線で江戸に向うこの道を通ったのでした。

一代将軍秀忠が、中原御殿と同じように小杉に御殿を建てたのは慶長13(1608)年。家康、秀忠、家光の三代にわたる将軍が鷹狩りなどの際、この御殿で休息し、さらに街道を通る西国の大名なども利用したようです。



まるごと丸子の渡し場あたり

田畑に使う下肥を手に入れるため、一日がかりで東京の五反田や大崎、三田あたりまで荷車を引いて出かけた農家。こうした農家や中原街道を通る人々にとって、昭和10年に丸子橋が完成するまでは、渡し舟が川を渡るための唯一の交通機関でした。

渡し場のすぐ近くまで松原通りの家々が並び、また、今の東横線の鉄橋から上流にかけては青木根という集落もありました。農家のほか多摩川の砂利取りや、川舟づくりを仕事とする人たちも多かつたようです。青木根に祀られていた伊勢神社のあたりは小高くな

つていて、数々の言い伝えもあり、昔から「特別な場所」とされていました。ここから埴輪などが出土し、古墳だったことがわかったのは、大正10年の築堤に伴う掘りくずし工事の時です。この築堤工事を境に青木根、松原の集落は河原から姿を消していきました。



●コンクリートと鉄橋の丸子橋（昭和50年頃）

旧名主家と長屋門

「陣屋町」のバス停の側の安藤家は、

その先祖が後北条氏に仕えたといわれる旧家です。主家の没落とともに土着帰農し、江戸時代にはこのあたりの割

元名主をつとめています。割元名主

というものは、いわば名主の代表格。近づきを防ぐための高札場

が高く立たれていたのです。

安藤家には他にも古文書や絵図など

が数多く残されており、これらもまた、昔を偲ぶ貴重な史料となっています。

この長屋門の内側に、時代劇で見かけるような高札が飾られています。これは明治4年に政府が出したもので、

緒を物語っています。

この長屋門の内側に、時代劇で見かけるような高札が飾られています。これは明治4年に政府が出したもので、

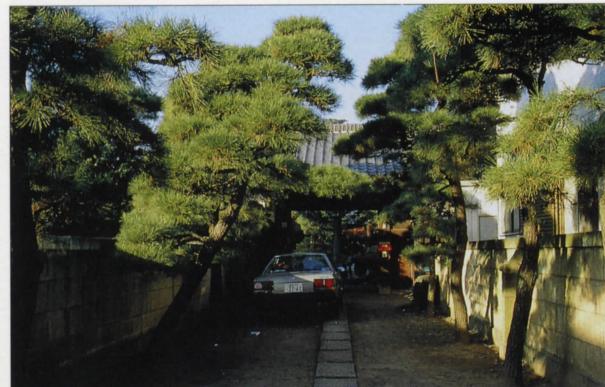
慶應四年三月
太政官定

一、人たるもの五倫の道を正しくすべき事
一、鰐寡孤独廢疾のものを憫むべき事
一、人を殺し、家を焼き、財を盗む等の悪業
あるまじき事

●安藤家に残る高札



●明治初期の安藤家



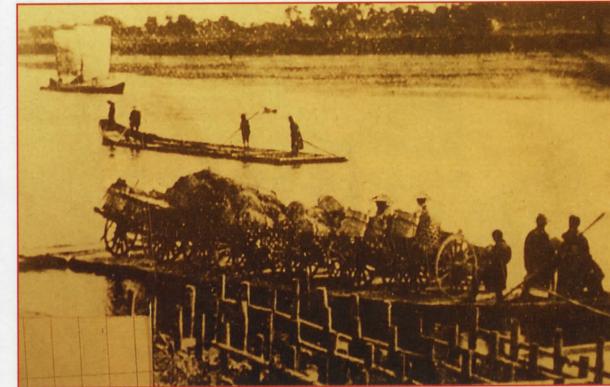
●安藤家の長屋門



●丸子古墳の埴輪



●渡し舟を待つ荷車（大正10年頃）



明治の醤油づくり

●醤油づくりが行われた工場(昭和50年頃)

日本人の食生活に欠かせないのが醤油です。その原型「醤」は平安時代、すでに生活必需品でした。醤油のもとた鎌倉時代に現れ、室町時代に「醤油」となります。醤油の完成期は江戸時代で、以後、工業的につくられるようになります。

さて、小杉の石橋醤油店は、明治年からここで醸造を始め、「キッコー文山」の商標で手広く商いをしていました。当時の醸造工場に置かれたままの大樽などの道具類から明治の頃の大きなりな醤油づくりを偲ぶことができます。



●当時の商標はキッコー文山

このほか、同じ中原街道沿いの神地では、木月堀の水を利用して朝山家の「朝陽」や少し遅れて始めた小川家の「ふんどん東陽」などの醤油も当時の市場を賑しています。

小杉御殿と「カギ」の道

石橋醤油店を過ぎ、街道を西に進む

と、正面に西明寺が見えてきます。西

明寺に向って街道の右側一帯が「小杉御殿」のあつた場所です。

御殿の敷地はおよそ一万二千坪(四万平米)。表御門、御主殿をはじめ、御殿番屋敷、御賄屋敷、御藏、御馬屋敷、裏御門などが建ち並んでいました。

さて街道は西明寺の前で左へ直角に曲り、すぐ先で今度は右へ直角に折れています。城下町でよく見られるこの「カギ」の道は見通しを妨げ、攻めにくくなる防衛上の工夫、背後の多摩川、近くの西明寺や泉沢寺とあわせて御殿

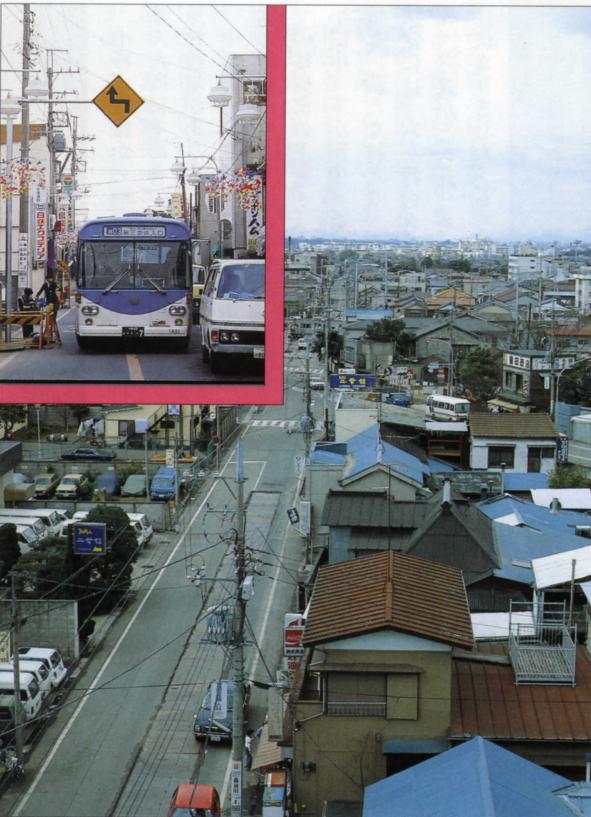
の守りが固められていたのです。

明治、大正と時代が変ると、このカギの道はここを通る馬車や荷車にとって大変不便なものになりました。川舟

づくりに使う長い材木を積んだ荷車は一度では曲げず、何度も切り返さないと進めませんでした。

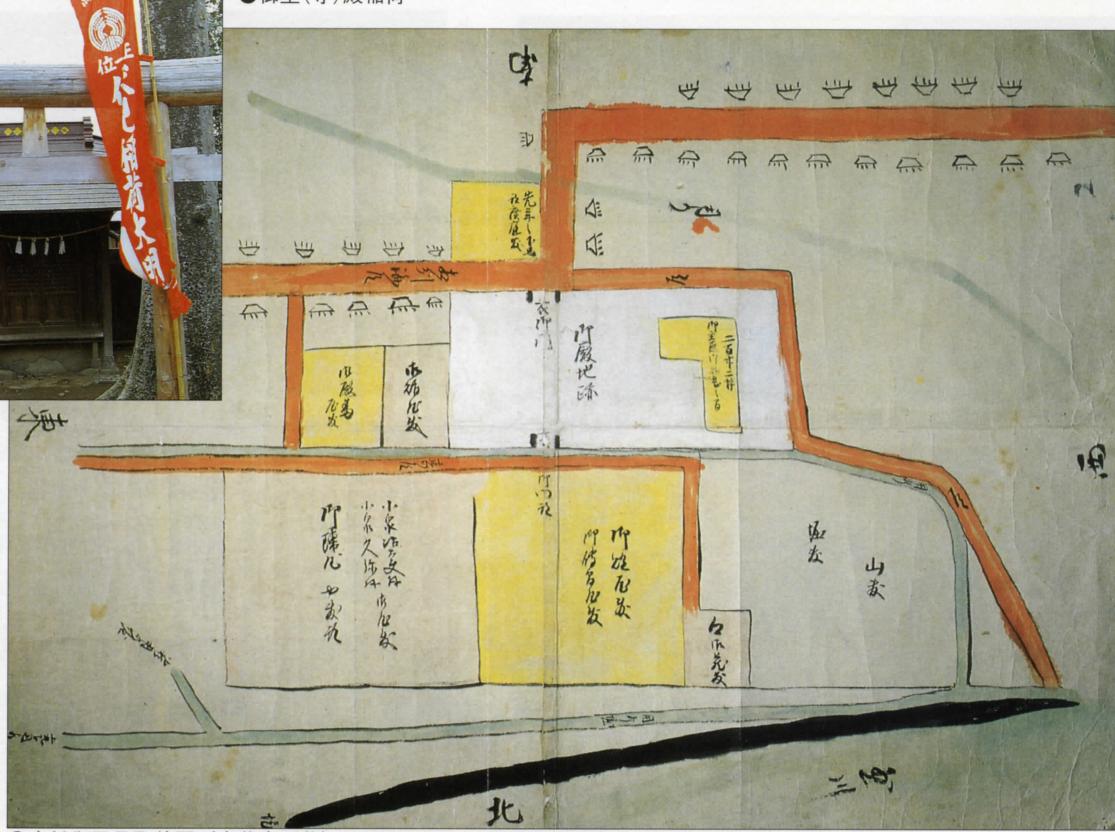
「カギ」の道は現代でもやはり厄介な道ですが、市内に残る、歴史を思いおこさせる珍しい道のひとつとして、味わい深く、捨てがたい魅力を持った存在です。

丸子橋方面からの中原街道(昭和50年頃)





●御主(守)殿稻荷



●小杉御殿見取絵図（安藤家所蔵）



●用水工事を監督する次大夫

小杉御殿は平塚の中原と江戸城を往来する家康の送迎のため、二代将軍秀忠が慶長13（1608）年に建てた仮御殿になります。その後寛永17（1640）年に増改築が行われ、広大な敷地に御殿ほか多くの屋敷が建ち並びました。

家康や秀忠、家光などが、「お鷹狩り」を兼ねて民情視察をした際にはここが休息所に使われました。また中原街道を通る西国の大名などもここを利用したようです。

後に、東海道が整えられると小杉御殿の存在意義も薄れていきます。明暦元（1655）年から万治3（1660）年の間に建物は品川の東海寺と上野の弘文院に移築され、小杉からは姿を消してしまいます。

御殿の中心的な建物「御主殿」の跡地に今祀られているのが御主（守）殿稲荷。「小杉御殿町」は小杉御殿にちなんで後につけられた地名です。

小杉御殿の御主殿跡

小杉陣屋と次大夫

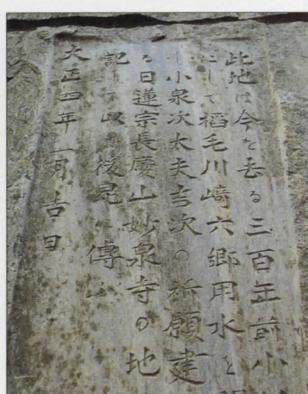
徳川家康が当初から力を入れたのは、
街道の整備と米の増産でした。

当時、多摩川沿いの村々は、川の流れに接しながら水利が悪く、草原、荒れ地、砂礫の河原ばかりで、四、五軒から十軒ぐらいの集落が散在する状況でした。この様子を見て、用水工事による新田開発の必要性を家康に進言し、工事の実施を任せられたのが、代官小泉次大夫です。

こうして、慶長2(1597)年、稻毛、川崎(右岸・二ヶ領用水)と世田谷、六郷(左岸・六郷用水)の合わせて四ヶ領に及ぶ用水建設が始まりました。

完成まで十四年を要する難工事でした。

次大夫は、右岸の小杉と左岸の柏江に陣屋を設け、工事の指揮監督にあたっています。小杉の陣屋は小泉陣屋、後に小杉陣屋と呼ばれ、現在の地名「小杉陣屋町」につながっています。次大夫は、安房(千葉県)小湊の妙本寺から日頃尊敬していた僧日純を招いて陣屋の裏の多摩川べりに妙泉寺を建てています。今も西丸子小学校前の墓所に次大夫の碑が残っています。



●妙泉寺の次大夫碑(裏)



●境界争いの裁決書、享保2(1717)年(安藤家所蔵)



●野村文左衛門の銘



●かつての川筋は、今等々力緑地に(昭和55年頃)

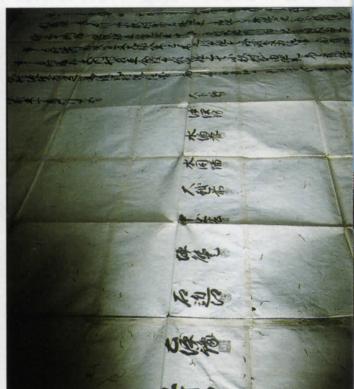




●西明寺の節分会



●境内の出世弁天



●裁決書の一部



●中原七福神の大黒天



●二宮金次郎像

この稻荷のあるあたりに小杉御殿の御藏がありました。当時はこのすぐ北側に接して多摩川が流れています。小杉御殿は川とその自然堤防に守られるよう設計されていたのです。

その頃の川筋は今等々力緑地になつていて、多摩川は遙か東を流れています。現在、川を挟んで川崎側と東京側に同じ地名が残っています。等々力もその一つで、むかし東京側に属していましたのが洪水で川の流れが変り、飛び地となつたものです。度重なる洪水の結果、明治末にはこのように分断された土地がいくつもでき、通学や耕作にも

船で渡るという有様でした。明治45年の境界変更に関する法律で、川の中心が境界となり、飛び地はそれぞれ編入され今に至っているわけです。

ところで、御藏稻荷の石段の一つに「野村文左衛門」の銘が刻まれています。この石は橋として使われていたものです。文左衛門は江戸後期の肥料商農民への奉仕と販路拡張のために、街道周辺の村々の木橋や土橋を石橋に変えました。今も文左衛門の「八百八橋」として語り継がれています。

●御藏稻荷



御藏稻荷と多摩川

明治6年には、「小杉学舎」がこの西明寺の本堂を借りて誕生し、小杉の宗智山派の寺です。もと有馬にあったのが、江戸の初めには、今の所に移されていましたと伝えられています。

中興の祖北条時頼にまつわる伝説があり、これにちなんだ弁財天が出世弁天として境内に祀られています。

参道入り口にある三つの石塔など境内には歴史を感じさせる石仏や石碑が多くあります。そのうちの一つは天保年間、日本が外交をめぐって揺れ動いた時代のもので、国家安全の文字が當時の人々の願いを示しているようです。

参道付近は、昔から火の見、消防小屋が置かれたり、明治政府が方針を伝える立て札を掲げた高札場があつたり、後に学校、集会所など公共的な施設が集まるこのあたりの中心地でした。

西明寺と小杉学舎

龍宿山西明寺は大日如来を祀る真言宗智山派の寺です。もと有馬にあったのが、江戸の初めには、今の所に移されていましたと伝えられています。

中興の祖北条時頼にまつわる伝説があり、これにちなんだ弁財天が出世弁天として境内に祀られています。

参道入り口にある三つの石塔など境内には歴史を感じさせる石仏や石碑が多くあります。そのうちの一つは天保年間、日本が外交をめぐって揺れ動いた時代のもので、国家安全の文字が当时の人々の願いを示しているようです。

参道付近は、昔から火の見、消防小屋が置かれたり、明治政府が方針を伝える立て札を掲げた高札場があつたり、後に学校、集会所など公共的な施設が集まるこのあたりの中心地でした。

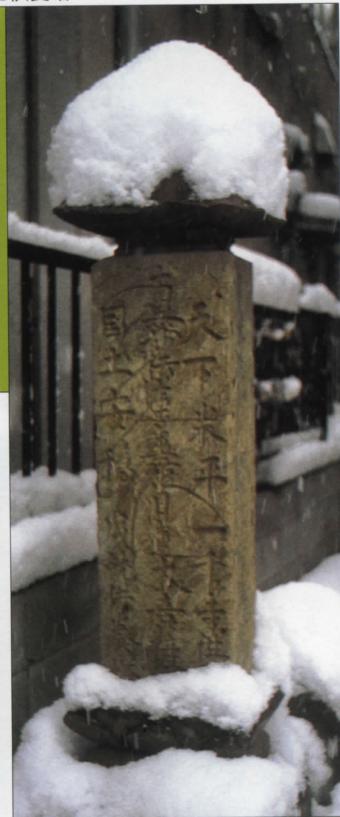
小杉駅と供養塔

小杉が宿駅に指定されたのは、東海道川崎宿から五十年遅れた寛文13(1623)年。しかし小杉が最も栄えたのはそれよりも前、小杉御殿のあった江戸初期の頃です。

西明寺の前からカギ形の道を曲った所に「つけぎや(附木屋)」という店があり、その横に供養塔があります。左側面をのぞくと、「武州橘樹郡稻毛領小杉駅」とあります。また、土台には「東江戸、西中原」の文字が読めます。

小杉村と書かずに、小杉駅と書いて小杉が宿駅であることを示し、さらに中原街道の両端の地名を刻んだのは、つ

けぎやの先祖鈴木戸右衛門という人でした。ところで、附木屋という屋号のことです。「付け木」は薄い板の先に硯黄を塗ったもの。先端を炭火などで燃やし、他のまきに火をつけるのに使われました。明治になってマッチが出回つても、しばらくの間使われたこの付け木を売っていた店「附木屋」が今の店の屋号となっているわけです。



●付け木

庚申塔と大師道

「カギ」の道を府中街道に向かつて西に少し進むと、横道に入る角に「庚申様」が祀られています。古くから

「油屋」の屋号を持つ家の角にあるので油屋の庚申様と呼ばれていました。

昔は、人の体内にいる小さな虫が、六十日毎に廻つてくる庚申の日に、天の神にその人の悪口を告げに行くと信じられていました。それで、人間の悪いところを普段から見聞きしないようなど、見ざる、聞かざる、言わざるの三猿を彫つて祀つたり、庚申の日は、虫が天に行かないように、寝ずにお祭をしたりしたのでした。油屋の庚

申塔にも三猿が彫られ、百年以上たつた今も付近に住む六軒の講中が庚申の日毎に集まっています。

庚申塔には道標を兼ねたものが多く、油屋の庚申塔にも、東江戸道、西大山道、南大師道と刻まれています。昔はここで大師へ向う府中街道が分れていたのです。今でもこの道は大師道と呼ばれています。



●油屋の庚申塔と台座の文字

小杉十字路



●かつて湯治客で賑った鉄鉱泉（昭和55年頃）

交った中原街道も明治になると、大分様子が変りました。特に、明治30年以後、府中街道と交差する所となつた小杉十字路付近は、料理屋、旅館、劇場、人力車屋、床屋、医院、郵便局などが集まり、このあたりの人々が「ロンドン・パリ」と呼んだほどの活気を呈したようです。また明治33年には「鉄鉱泉」が開業しています。東京から仕入れた原液を使った湯治用の風呂ですが、よく効くというので付近の村々や、東京、埼玉からもお客様が来たそうです。

大正2年に中原街道と府中街道を乗

合い馬車が走ったときには、この十字路の所が停留所でした。小さな部屋があつて、ラムネ、酒、料理など飲食しながら待っていると、鉄輪を始めた馬車がガタガタ音をたて、ラッパを鳴らしながら一時間毎にやつてきたものであります。大正7年にはその「ガタ馬車」もわざわざ待っています。

東横線や南武線が開通し、駅が今之所に決まる、交通の要所もそちらに移り、十字路あたりの性格は徐々に変わり、自動車に変わっています。



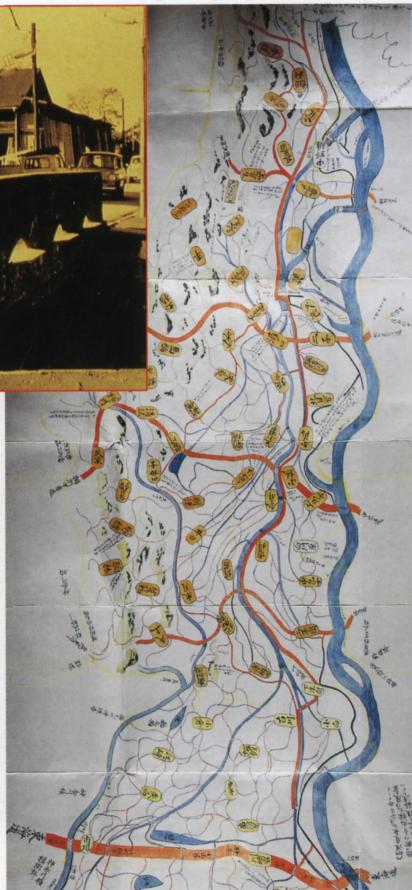
●乗合自動車（昭和6年頃）

二ヶ領用水と神地橋

多摩川の水は多摩区中野島と宿河原の二箇所から取り込まれ、高津区の久地駅近くで合流し、「久地分量樋」へ導かれていきました。ここで四つの堀に水が分けられていたのです。最も多量の水が流された川崎堀はいわば二ヶ領用水の本流で、この本流からさらに細かい堀が分かれていました。上小田中から分れる井田堀、宮内からの木月堀、市ノ坪からの上平間堀などで、これらの用水は、井田、今井、北加瀬など稻毛領の村々を潤していました。このあたりでとれた質の良い米は「稻毛米」と呼ばれ、江戸の人々に喜ばれました。

昭和12年に橋はコンクリートに変えられましたが、木橋の欄干から用水に飛び込んで泳いだ思い出を語る人も多く、村の子供たちにとつて用水は格好の遊び場でもあったようです。

●二ヶ領用水流域図



多摩川の水は多摩区中野島と宿河原の二箇所から取り込まれ、高津区の久地駅近くで合流し、「久地分量樋」へ導かれていきました。ここで四つの堀に水が分けられていたのです。最も多量の水が流された川崎堀はいわば二ヶ領用水の本流で、この本流からさらに細かい堀が分かれていました。上小田中から分れる井田堀、宮内からの木月堀、市ノ坪からの上平間堀などで、これらの用水は、井田、今井、北加瀬など稻毛領の村々を潤していました。このあたりでとれた質の良い米は「稻毛米」と呼ばれ、江戸の人々に喜ばれました。

昭和12年に橋はコンクリートに変えられましたが、木橋の欄干から用水に飛び込んで泳いだ思い出を語る人も多く、村の子供たちにとつて用水は格好の遊び場でもあったようです。

●かつての神地橋



●一時は桃の産地だった

泉沢寺と門前市



●泉沢寺のお施餓鬼（昭和45年頃）

淨土宗の泉沢寺は、吉良氏の菩提寺として、世田谷の烏山にあつたものが焼失したため、天文19(1550)年、中原の現在地に再建されました。当時吉良氏は後北条氏のもとで全盛時代にあり、その勢力は世田谷から川崎中部、横浜・戸田町一帯に及んでいました。その中心部にあって地味が肥え、耕地化も進み、さらに以前から「市」のあつた上小田中に吉良氏は注目し、ここを基盤とする一層の繁栄を図つたのです。

上小田中の市から泉沢寺の堀際までを寺門前とし、ここに住む者には税や労役を免除するとして居住を促し、門

良氏は後北条氏のもとで全盛時代にあり、その勢力は世田谷から川崎中部、横浜・戸田町一帯に及んでいました。その中心部にあって地味が肥え、耕地化も進み、さらに以前から「市」のあつた上小田中に吉良氏は注目し、ここを基盤とする一層の繁栄を図つたのです。

上小田中の市から泉沢寺の堀際までを寺門前とし、ここに住む者には税や労役を免除するとして居住を促し、門

前市を盛んにしたことが、泉沢寺所蔵の古文書からわかります。これにより、諸方から農民が集まり住み、門前市は大いに賑つたということです。

世田谷にも少し遅れて同様の市ができました。二つの市は「夏の泉沢寺お施餓鬼、冬の世田谷ボロ市」として名残りを留めています。現在、年末年始に開かれ大いに賑うボロ市に比べ、泉沢寺のお施餓鬼は境内に一、二軒露店が並ぶ程度で、少し淋しい気がします。



●泉沢寺



旧中原村役場跡

小杉十字路から西に二百メートル程進んだ所にその昔、平屋で瓦屋根の中村役場がありました。

中原村の誕生は明治22年、市制町村制の施行に伴つてのことです。それまでの橘樹郡の上丸子、小杉、宮内、上小田中、下小田中、新城の六ヶ村が合併し、新たな村となつたもの。村名の決定には、六ヶ村の各代表による「入札」方式がとられ、その結果「中原」に決まりました。もちろん中央を通る「中原街道」にちなんでの村名です。

中原町は昭和8年川崎市に編入され、町名「中原」は一旦消えますが、昭和47年、川崎市が指定都市になつたとき



●村役場跡付近（昭和58年頃）

●世田谷ボロ市



●旧中原町役場

中原村の誕生は明治22年、市制町村制の施行に伴つてのことです。それまでの橘樹郡の上丸子、小杉、宮内、上小田中、下小田中、新城の六ヶ村が合併し、新たに中原村となつたもの。村名の決定には、六ヶ村の各代表による「入札」方式がとられ、その結果「中原」に決まりました。もちろん中央を通る「中原街道」にちなんでの村名です。

中原町は昭和8年川崎市に編入され、町名「中原」は一旦消えますが、昭和47年、川崎市が指定都市になつたとき

さて、役場をどこに建てるか……。
役場は村の中心に、ということで行わ
れました。もちろん中央を通る「中原
街道」にちなんでの村名です。

中原区となつて復活しています。

木月堀と「くらやみ」

づき ぱり

中原街道は、二ヶ領用水の支流と何箇所かで交差します。木月堀もその一つ。今は暗渠となり、水の流れを目で見ることはできませんが、木月堀の水は二ヶ領用水の支流の中でも特に澄んでいたといわれ、かつては、この水を使つた醤油の醸造も行なわれています。

街道に面して南側、このあたりの資産家だった朝山家が明治時代に、その後を受けて大正、昭和に小川家が、それぞれ「朝陽」「ふんどん東陽」の商標で売り出しました。

街道を挟んで向い側の原家は、かつて地域の名主をつとめたという旧家。

この家を地元では、昔から「くらやみ」と呼んでいます。広い屋敷がこんもりと茂つた木々に陽を遮られているように見えるので、その名がついたのです。

中原街道沿いもどんどん近代化されましたが、木月堀に沿う「くらやみ」のあたりは閑静なたたずまいを残し、往事を偲ぶことができます。



街道と地蔵尊

古くからの道には、今でも道端に石仏や石の道標が残っています。中原街道を歩くと、やはり数多くの祠や、石碑が目に止まります。特に二ヶ領用水支流と交わる所に目立つようです。

たとえば、藤田屋酒店のわきに祠に入った地蔵様がありますし、街道を挟んで向い側にもあります。ここは、街道と「井田堀」との交差する所。

思いが込められているこれらの地蔵尊は、同時に、ついこの間まで、地元の祭や、歳の市が開かれる際には、その中心地、拠り所として欠かせぬ存在でもあつたのです。

用水に落ちて亡くなつた子供の供養のため、街道で行き倒れになつた旅人のため、川ざらいをしたときに出できた仏像を祀つて……など様々な言い伝えがあります。昔の人々のいろいろな



●街道沿いに残る石仏



●原家を囲む木々（昭和58年頃）

●参考文献

- 川崎誌考 ●山田蔵太郎 ■石井文庫・S2
稻毛川崎二ヶ領用水事績 ●山田蔵太郎 ■稻毛川崎二ヶ領普通水利組合・S5
中原教育八十年誌 ●中原教育八十年誌刊行会 ■同・S29
川崎史話 ●小塚光治 ■多摩史談会・S37~41
川崎市史 ●川崎市 ■同・S43
中原街道 ●川崎市立稲田図書館 ■同・S46
文化かわさき ●川崎市総合文化団体連絡会 ■同・S50~
やさしい川崎の歴史 ●小塚光治(編) ■住吉書房・S53
閑話雑記 ●川崎市 ■島崎文教堂・S53
目で見る中原街道 ●羽田猛 ■同・S54
かわさき散歩 ●川崎市総合文化団体連絡会 ■同・S55
わが町の歴史川崎 ●村上直 ■文一総合出版・S56
神奈川ふるさと風土図 ●萩坂昇 ■有峰書店新社・S57
しょうゆ 味の旅 ●河野友美 ■玉川大学出版部・S57
川崎さんちの地名判断 ●土方恵治 ■同・S58

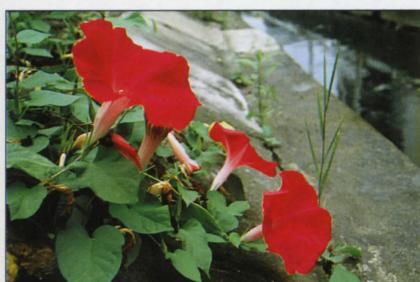
無断転載を禁ず



●川崎歴史ガイドのシンボル・マーク

このシンボル・マークは、古代の鏡を現わしています。歴史は私たちの祖先がつくりだしたものですが、それを再び映したのが、川崎歴史ガイド計画です。シンボル・マークは、歴史を甦らせ、映しだす鏡です。ガイド用の“柱”の上に、それが必ずついています。

デザイナ=粟津 潔



ガイドパネルデザイン=粟津 潔+清水まこと

Design=粟津デザイン室 Photo=小池 汪

連絡先=財団法人 川崎市文化財団

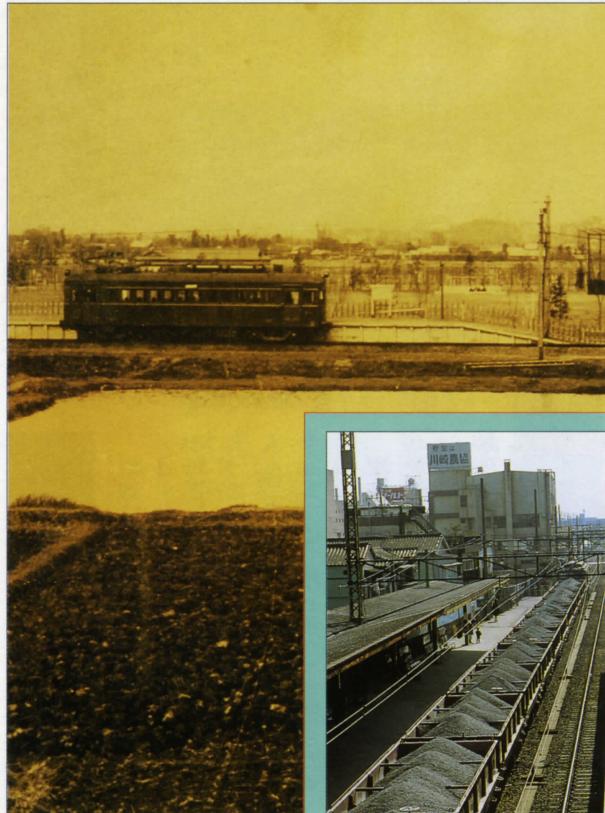
〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町12-1 タワーリバーアク3F

☎044-222-8821 FAX 222-8817 領価=100円

印刷=(株)アサヒ

昭和59年3月発行
平成15年4月増刷

●南武線グランド前駅(今の武藏小杉駅。昭和初期)



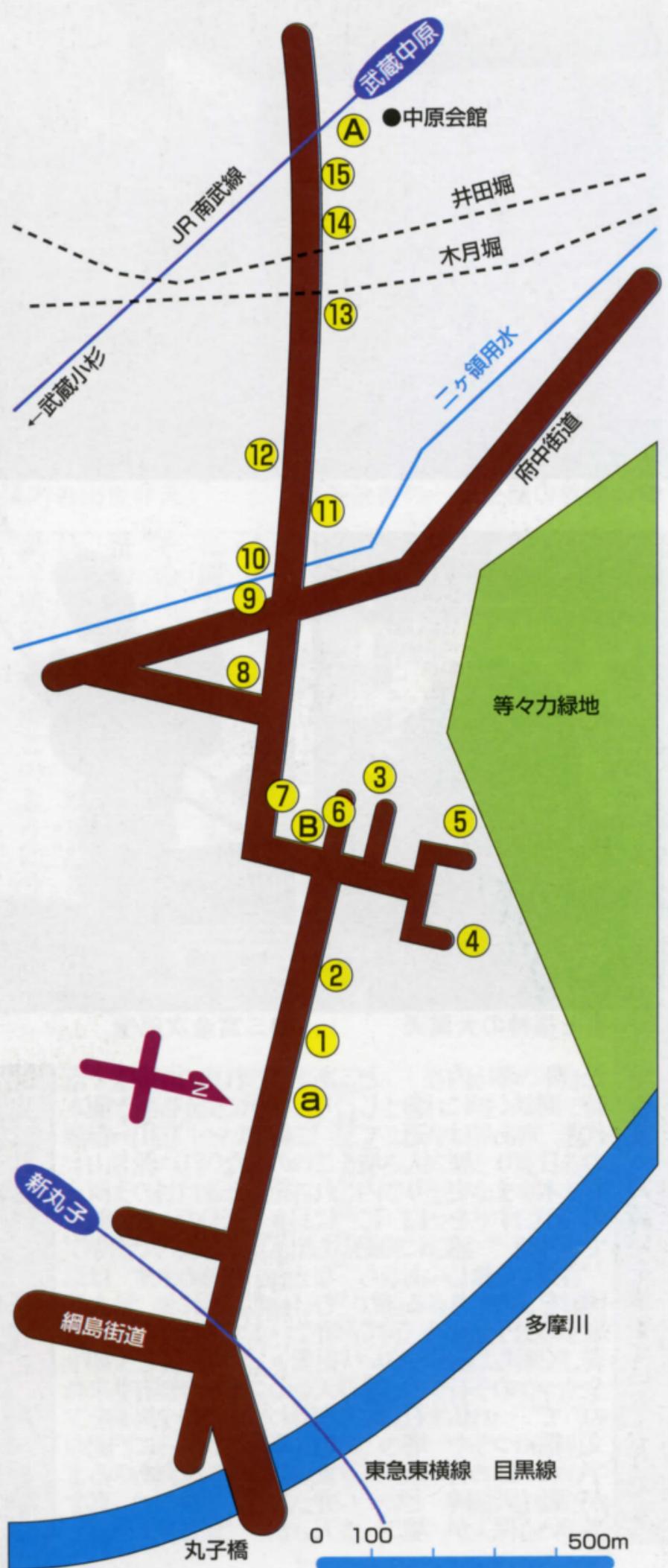
●石灰石を運ぶ貨車(昭和58年頃)

南武線は南武電気鉄道株式会社により昭和2年、川崎・登戸間に開通したのが始まり。昭和4年には早くも立川まで伸びています。この鉄道は多摩川の砂利採取や奥多摩の石灰石輸送に力を入れるなど、当初は貨物輸送が重視されたため、駅はどれもその頃の町はすれに設けられました。昭和10年代、各駅を中心に工場群が形成されていくのも、駅付近の土地が安い上、貨物駅としての便利さがあつたからです。向河原駅の日本電気、武藏中原駅の富士通信機製造などが沿線工業化の先駆でした。

戦時中の昭和19年、南武電気鉄道は国有化され、国鉄南武線になりました。戦後、旅客専用線となつてしばらくは乗客の少い時代が続きますが、近年川崎北西部の宅地化が進むにつれ、川崎を縦に走る唯一の電車として大いに利用され、今ではJR東日本の黒字路線の一つとなっています。



南武線の歴史



- | | |
|---------------|--------------|
| ○—川崎歴史ガイド | ⑧—庚申塔と大師道 |
| ⓐ—中原街道(小型) | ⑨—小杉十字路 |
| ①—旧名主家と長屋門 | ⑩—ニヶ領用水と神地橋 |
| ②—明治の醤油づくり | ⑪—泉沢寺と門前市 |
| Ⓑ—小杉御殿と「カギ」の道 | ⑫—旧中原村役場跡 |
| ③—小杉御殿の御主殿跡 | ⑬—木月堀と「くらやみ」 |
| ④—小杉陣屋と次大夫 | ⑭—街道と地蔵尊 |
| ⑤—御藏稻荷と多摩川 | ⑮—南武線の歴史 |
| ⑥—西明寺と小杉学舎 | Ⓐ—中原街道 |
| ⑦—小杉駅と供養等 | |

中原街道ルート



■川崎歴史ガイドパネル所在地

- | | |
|---------------------|-----------------------------|
| ①—中原街道ルート総合案内(Aパネル) | ⑫—小杉十字路 |
| ②—同ルート案内(Bパネル) | ⑬—高元寺と寺子屋
(ニヶ領用水ルート) |
| ③—旧名主家と長屋門 | ⑭—ニヶ領用水と神地橋
(兼 ニヶ領用水ルート) |
| ④—明治の醤油づくり | ⑮—泉沢寺と門前市 |
| ⑤—小杉御殿と「カギ」の道 | ⑯—旧中原村役場跡 |
| ⑥—小杉御殿の御主殿跡 | ⑰—木月堀と「くらやみ」 |
| ⑦—小杉陣屋と次大夫 | ⑱—街道と地蔵尊 |
| ⑧—御蔵稻荷と多摩川 | ⑲—南武線の歴史 |
| ⑨—西明寺と小杉学舎 | |
| ⑩—小杉駅と供養塔 | |
| ⑪—庚申塔と大師道 | |



Aパネル①総合案内板



Bパネル⑫小杉十字路



Bパネル⑮小杉御殿と「カギ」の道